

コメントに代えてーリエージュと国境ー

多田 哲

「国境を超える歴史学」と題して開催されたこのワークショップでは、村上司樹、服部良久両氏の報告を得た。村上報告は、現在のスペインにおいて国境と位置付けられ、自立傾向を強めて2017年10月には事実上の独立を宣言するに至った、カタルーニャに関するものであった。興味深い論点としては、次の2点が挙げられよう。第1に、現在のカタルーニャ州の源流として、中世におけるカタルーニャ「国家」の存在が近代歴史学で主張されてきたことに対し、「国家」形成と見なしうる事件は紀元千年前後にはなかったとした。第2に、中世においても「国境」とされていたカタルーニャの内部にも、「中心」と「国境」が存在していたという主張である。服部報告は、フリードリヒ・バルバロッサの国王巡行路を基にしたものであった。興味深い点としては、第1に国王支配の研究素材であった国王巡行路を、中世ドイツの西側国境を検出するために用いたことであった。第2に、上記の作業で検出されたムーズ＝ソーヌ＝ローヌ川という境目は、フランス側からも尊重されており、両国間で国境と見なされていた、というものであった。

このように両氏の報告は、カタルーニャであれ独仏国境であれ、第3者の冷静な視点から見たものであった。それに対して本稿ではコメントに代えて、ある人びとにとって、国境はどのようなものであったのかという、当事者の視点で考えてみたいと思う。その例として取り上げるのは、筆者がこれまでに研究したことのあるリエージュという町である。リエージュは、ブリュッセル、アントウェルペン（アントワープ）、ヘント、シャルルロワに続く、ベルギー第5の都市である。日本で言えば第5位は札幌であるが、札幌市の人口1,963,626人（2018年1月1日現在）に対して、リエージュ市は196,372人（2015年12月31日現在）であり、人口規模で見れば約10分の1である。リエージュ市の面積は69.39平方キロであり、愛知県内の都市で言えば安城市よりやや狭い面積に、やや多い人数が居住していることになる¹。リエージュはこれまで、ブリュッセル、アントウェルペン、ブルッヘ（ブリュージュ）といったほかのベルギー都市と比べると、日本では知名度が低かったように思われる。しかし東京オリンピック・パラリンピックのロゴマークとして2015年7月に公表されたものが、リエージュ劇場のロゴマークに類似している問題が提起され

たことにより、リエージュの名が広く知られることになった²。

リエージュの最古の居住地はムーズ川と支流レジア川の合流地点であり、すでに先史時代より居住者がいた³。しかしリエージュの人びとがはじめて国境に囲まれたのは、古代ローマによってであろう。前58から前51年のガリア戦争の末に、カエサルはガリア全土をローマ領とし、リエージュの人びともその支配に服することになったと考えられる⁴。むしろ当時の国境は、現代の領域国家のそれとは本質的に異なっていたし、人びとが国境をどのように意識していたかは定かではない。しかしリエージュの人びとは古代ローマに以前に、なんらかの国家を経験したことは、まずなかったと言ってよいだろう。

その後リエージュはローマ化され、いわゆるガロ＝ローマ人の居住地となった。しかしローマ帝国末期よりフランク人、とくにリプアリア支族の支配に服することになる。リエージュがフランク王国に編入された時期を特定することは難しい。メロヴィング朝クロヴィス1世がその晩年期の508～511年に、リプアリア支族の王シギベルトの王国を滅亡させたとき、リエージュもクロヴィスの傘下に入ったと見られる⁵。そして、クロヴィスがフランク王国を分割して息子たちに相続させたことから、511年に分王国が登場した。リエージュは、北東部のアウストラシア分王国に属することになる。メロヴィング朝フランク王国はその後、再統合と分王国出現を繰り返しながら推移した。王国の分裂傾向にとりあえずの終止符を打ったのは、アウストラシア分王国宮宰のピピン2世であった。彼は687年のテルトリの戦いで勝利し、全王国に覇権を打ち立てたとされる⁶。なお「リエージュ」の名がはじめて言及されたのは、8世紀初頭である。703年と推定される司教ランベルトゥスのリエージュでの殉教が、『第1 聖ランベルトゥス伝』（727－743年執筆）にて伝えられている。また714年のグリモアルト2世（ピピン2世の息子）のリエージュでの暗殺が、『フランク人の史書』（727年執筆）で記録されている⁷。

フランク王国は、ピピン2世の孫にあたる宮宰ピピン3世が、751年に王位に登ってカロリング朝となった。新しい王朝となっても、フランク王国は分割相続の危険にさらされたが、ルイ1世敬虔帝が没するまでは結果的に統一が維持された。しかし843年のヴェルダン条約により、王国は敬虔帝の息子たちの間で分割された。リエージュの人びとは、長男であり帝位を継いだロタール1世の国、中部フランク王国に属することになった。中部フランク王国は、ロタール1世が855年に死去すると、さらに3分割される。リエージュはこれにより、ロタール1世の次男であるロタール2世の治める国家に属した。この国は王の名にちなんで「ロタールの王国」、すなわちロタリングアと呼ばれることになる⁸。ロタール2世死後の870年、ロタリングアはメールセン条約にて、叔父のルートヴィヒ2世ドイツ人王（東フランク）とシャルル2世禿頭王（西フランク）の間で分割された。その

国境はムーズ川とウルト川に置かれたとされるので、ムーズ河畔のリエージュの帰属を判断するのはやや難しい。市の中心部はムーズ川左岸であるので、西フランク王国に属したことになる。しかしムーズ川本流の右岸で、支流との間に挟まれた中洲にあるウトゥルムーズ地区の帰属はいずれであったのか。こうした曖昧模糊とした状況は、880年のリブモン条約で一応の終止符が打たれる。この条約で全ロタリングアは東フランク王国領となり、リエージュの人びとはルートヴィヒ3世若年王の支配に服することになった⁹。その後、東フランク王国でカロリング朝が911年に断絶すると、ロタリングアの人びとは西フランク王国に属することを選択する。西フランクにはまだカロリング朝が継続し、シャルル3世単純王が在位していたからである。しかしロタリングアは、925年に東フランク王国に復帰する。ザクセン朝ハインリヒ1世に軍事的に制圧され、東フランクの第5の公領となったのである¹⁰。

ザクセン朝を継承したオットー1世は、962年にローマ皇帝位を獲得する。のちに神聖ローマ帝国と呼ばれる国家の起源である。しかしこの動きに前後して西ヨーロッパ全域で権力の細分化が進行し、神聖ローマ帝国内でも領邦国家が自立を強めていった。ロタリングアもその例外ではなかったが、リエージュの人びとは若干異なった経験をした。985年にオットー3世はリエージュ司教ノトゲルスに対し、ウイ伯領を与えた。これがリエージュ司教領という、聖界君主によって治められる領邦国家の誕生とされる¹¹。現在、カトリックの高位聖職者を元首にいただく国家は、ヴァティカン（ローマ教皇）とアンドラ（ウルヘル司教・フランス大統領の共同元首）の2か国のみである。しかし当時の神聖ローマ帝国には、ケルン大司教、マインツ大司教、トリアー大司教、ユトレヒト司教など数多くの聖界君主が存在した。これはザクセン朝の推進した帝国教会政策によるものである。皇帝は世俗の領邦君主の力を抑えるため、意図的に聖界君主に広範な世俗的権力を付与し、帝国の体制を維持しようとしたのである¹²。その後もリエージュ司教領は、周辺の領地や城塞、修道院を併せて拡大した。叙任権闘争後は帝権からの自立を決定的にし、エノー伯を封建的家臣に加えるなどさらに強大になった。拡大傾向は1361年まで続き、この時点でリエージュ司教領の国境線が確定した¹³。リエージュの町は常に平和であったわけではないが、人びとは首都の住民として、周囲の諸国に比べると相対的に安定と繁栄を享受した。リエージュの人口は、15世紀末の時点で20,000人、18世紀には53,000から56,000人を数えるまでになった¹⁴。しかし18世紀末のフランス革命は、リエージュの人びとにも多大な影響を与えることになる。

1789年8月18日にリエージュでも革命が勃発し、君主であるリエージュ司教は逃亡した。しかし1791年1月13日に、オーストリア軍がリエージュを占領して革命を終わらせ、

旧体制が復活した。その後、フランス革命軍によるリエージュ占領（1792年11月28日）、オーストリア軍による旧体制再復活（1793年3月）、フランス軍による再占領（1794年7月）と、体制が目まぐるしく交替した。そして1795年10月1日、フランスはリエージュ司教領の併合を正式に宣言し、800年以上続いた司教領は終焉を迎えた。リエージュの人びとは925年以来約8世紀半ぶりに、フランスの国境の内側に入ることになったのである。リエージュはその後20年のあいだ、フランスにとどまった¹⁵。

ナポレオンが失脚した後の1814年7月、リエージュを含む南ネーデルラントは、オランジェ家のウィレム1世の統治下に入った。そして1815年6月のウィーン議定書に基づき、リエージュは正式に、ウィレム1世を元首とするオランダ王国に編入された。ウィレム1世は南ネーデルラントに対し、オランダに同化させる政策を推進した。しかしこの試みは15年で破綻することになる¹⁶。1830年にパリで七月革命が勃発し、その余波は翌月に南ネーデルラントに到達した。ベルギー独立革命である。リエージュの人びとも8月末より暴動に加わった。9月から10月にかけて、オランダ軍と革命軍の戦闘が続き、10月27日に南ネーデルラントは解放された。そして1830年11月18日、現在に続くベルギー王国の独立が宣言されたのである¹⁷。

1790年代の混乱は、リエージュの停滞を導いていた。しかし19世紀における発展はめざましく、ベルギー革命前の1829年にはフランス革命前の人口水準にまで回復し、リエージュには58,000の人びとが住むようになった。そして産業革命はさらにリエージュを発展させ、1846年には76,000人の人口を数えるようになっていた¹⁸。さて20世紀に入ると、リエージュの人びとは2度、ベルギー以外の国家に支配された。第一次世界大戦の時代（1914年8月～1918年11月）、第二次世界大戦の時代（1940年5月～1944年9月）のいずれにおいても、ドイツの占領下に置かれたのである¹⁹。

21世紀のリエージュを囲む国境は、どうなっていくのだろうか。ベルギーが現在の国境線を今後も維持できるか、極めて不透明な状況である。それはアントウェルペン、ヘントなどを含む北部のフランデレン（フランドル）地域と、リエージュなどを含む南部のワロニー地域の対立が深刻化しているからである。両者の対立は19世紀中期にはじまり、1993年にベルギーは連邦制国家に移行している²⁰。そして2010年6月の総選挙後に、両者の対立から連立政権の発足が難航を極め、540日もの政治空白を招いたことは、記憶に新しい²¹。ワロニー地域の首府は現在、ナミュールに置かれている。仮にベルギーが南北に分裂した場合の首都は、どこに置かれるのだろうか。いずれにせよ最大の都市リエージュの人びとは、国家をリードしていく立場を担うことになるのではないか。

このようにリエージュを囲んできた国境は、われわれ愛知県民から見れば、かなり変動

が大きいものであった。さりとて、一個の人間の立場からすれば、一生のうちにそう何度も所属国が変わるわけではない。そうしたなかで注目すべきは、9世紀後半から10世紀初頭（カロリング時代後期）と18世紀末から19世紀初頭（フランス革命とナポレオン戦争）の、2つの時期である。この時代、リエージュの人びとは、度重なる国境線の引き直しを経験した。筆者の専門はカロリング時代の教会史である。そこで9世紀後半から10世紀初頭の国境変更を、専門に引き寄せて考えてみたい。筆者は2014年に『ヨーロッパ中世の民衆教化と聖人崇敬ーカロリング時代のオルレアンとリエージュー』なる書を出版する機会を得て、その半分をリエージュ司教区の教会史の検討にあてた。その結果、民衆教化を含む教会の活動は、所属国家の変更にもかかわらず、カロリング時代を通じて脈々と継続されたことが判明した。そればかりか、この時期に前後して「カロリング・ルネサンス」と称される文芸活動の活発化が、リエージュでも見られるようになる。その代表者は、アイルランド詩人セドゥリウス・スコトゥスであった。当時の文芸は教会文化の上に成り立っており、文芸の隆盛は教会活動の活発化の証拠でもある²²。このように見ていくと、国境線の頻繁な引き直しは、リエージュの教会活動にさしたる影響を与えることはなかったようである。その理由を挙げるとするならば、リエージュ司教区という枠組みの盤石さであろう。古代末期から明瞭になってくるこの枠組みは、9世紀後半から10世紀初頭の混乱期にあっても、分割されることも併合されることもなく、厳然と維持された。そしてこの枠組みが、リエージュ司教領という領邦国家に継承されていったのである。

しかし国家興亡に翻弄される人びとが、リエージュに存在しなかったわけではない。それは司教をはじめとする高位聖職者である。フランク王国ないしはその分王国においては、王国集会が年に1～2回開催されることになっていた。そこには伯などの世俗の高位貴族とともに高位聖職者が招集された。また、教皇権の強力な中世中期とは異なり、教会会議も国家単位で開催された。それは初期中世の教会会議は、基本的に王国集会のシステムに依存していたからである。教会会議と言えば、聖職者のみの会合を想像してしまうかもしれない。しかしそれ以外にも、聖俗が別個に部会を形成する会合、聖俗がともに参加する会合も存在した。後者の場合は、国王集会との区別がつきにくい²³。この時代にリエージュ司教をつとめたのが、ハルトガリウス（在位840～855?年）、フランコ（在位856～901年）、ステファヌス（在位901～920年）、リカリウス（在位920～945年）の4人である。彼らは国境が変更されるたびに、別の国に出向くことになっただろう。なかでも時代にもっとも翻弄されたのが、フランコである。彼はその在位中に4つの国家を経験した（中部フランク王国・「ロータルの王国」・西フランク王国・東フランク王国）。所属変更のたびに、これまでとは違う国の会議に出席していたことが知られている²⁴。

このようにリエージュと国境という問題を考えるとき、国境によって影響される要素とそうでない要素が、同時並行で存在することを銘記すべきである。

注

¹ 「人口統計」『札幌市公式ホームページ』2018年1月30日
<<https://www.city.sapporo.jp/toukei/jinko/jinko.html>>; ‘Structure de la population’, *Ville de Liège: Tableau de bord de la population Liégeoise 2015*, < <http://www.liege.be/telechargements/pdf/vie-communale/carte-de-visite/tableau-de-bord-population-2015.pdf>> [accessed 30 January 2018], p. 7; Shady Attia, ‘Overview and Recommendation on Urban Densification Potential in Liège, Belgium’ < <https://orbi.ulg.ac.be/bitstream/2268/182805/1/Overview%20Urban%20DensificationAttia.pdf>> [accessed 30 January 2018], p. 2. 2018年2月1日現在、安城市の人口は 188,125 人、面積は 86.05 平方キロである(安城市「最新の人口・世帯数」『安城市ホームページ』2018年2月26日<<http://www.city.anjo.aichi.jp/shisei/tokei/jinkousetai.html>>; 「17 安城の統計」『安城市ホームページ』2018年2月26日<<http://www.city.anjo.aichi.jp/shisei/tokei/anjonotoukei15.html>>).

² 「東京五輪旧エンブレム問題、IOCと組織委がドビ氏訴訟取下げを確認」『知財情報局 IP-NEWS』, 2016 年 2 月 2 日発信) 2016 年 12 月 15 日<http://news.brainia.com/2016/0202/judge_20160202_001_.html>.

³ Marcel Otte, ‘Les origines de la cité’, in *Histoire de Liège*, ed. by Jacques Stiennon, Univers de la France et des pays francophones (Toulouse: Privat, 1991), pp. 21-31 (pp. 21-27); Régis de La Haye, ‘Liège’, in *Topographie chrétienne des cités de la Gaule des origines au milieu du VIII^e siècle*, ed. by Nancy Gauthier and others (Paris: De Boccard, 1986-), xii: *Province ecclésiastique de Cologne (Germania Secunda)* (2002), pp. 117-24 (p. 118).

⁴ Michel Dubuisson, ‘La période romaine (de César à Dioclétien)’, in *Histoire de la Wallonie: De la préhistoire au XX^e siècle*, ed. by Bruno Demoulin and Jean-Louis Kupper, Histoire des territoires de France et d’Europe (Toulouse: Privat, 2004), pp. 57-83 (pp. 61-66); 斎藤綱子「ベネルクスの古代・中世」森田安一編『新版 世界各国史』14, 「スイス・ベネルクス史」(山川出版社, 1998 年)所収, 168-242 頁(とくに 171 頁)。

⁵ Ian Wood, *The Merovingian Kingdoms, 450-751* (London: Longman, 1994; repr. 1997), p. 49; Alan Dierkens, ‘Le haut Moyen Âge (du IV^e siècle à 925)’, in *Histoire de la Wallonie*, pp. 85-105 (p. 88).

⁶ Wood, pp. 255-59; 斎藤, 前掲, 177-78 頁。

⁷ 多田哲『ヨーロッパ中世の民衆教化と聖人崇敬ーカロリング時代のオルレアンとリエージュー』(創文社, 2014 年) 188 頁; La Haye, p. 118.

⁸ 多田, 前掲『ヨーロッパ中世の民衆教化と聖人崇敬』80-81 頁; Dierkens, pp. 102-03.

⁹ Dierkens, pp. 103-04. なおウトウルムーズ地区への居住は, 10 世紀になるまで明確ではない(Kupper, ‘Le village était devenu une cité’, in *Histoire de Liège*, pp. 33-73 (pp. 44-45)).

¹⁰ Dierkens, p. 104; Jean-Louis Kupper, ‘Le temps de principautés, des seigneuries et des villes (X^e-XIV^e siècles)’, in *Histoire de la Wallonie*, pp. 107-26 (p. 107); 斎藤, 前掲, 179 頁。なお東フランク王国が自称として「ドイツ」と呼ばれるようになったのは, 12 世紀初頭のことである(三佐川亮宏『ドイツ史の始まりー中世ローマ帝国とドイツ人のエトノス生成ー』(創文社, 2013 年))。

¹¹ Kupper, ‘Le village était devenu une cité’, p. 39; Kupper, ‘Le temps de principautés’, pp. 108-14; 斎藤, 前掲,

185-98 頁。

¹² 松本宣郎, 前沢伸行, 河原温編『文献解説 ヨーロッパの成立と発展』(南窓社, 2007 年) 116 頁。

¹³ Kupper, ‘Le temps de principautés’, pp. 113-15.

¹⁴ Bruno Demoulin, ‘La principauté de Liège de sa Renaissance à la Révolution’, in *Histoire de la Wallonie*, pp. 195-213 (pp. 195-211); 河原温「ベルギー・ルクセンブルク」森田編, 前掲, 所収, 339-439 頁(とくに 351-52 頁)。

¹⁵ Etienne Hélin, ‘Lumières, révolutions, annexions, 1748-1830’, in *Histoire de Liège*, pp. 177-202 (pp. 182-90); Demoulin, pp. 211-13; 河原, 前掲, 368-71 頁。

¹⁶ Hélin, p. 200; Philippe Raxhon, ‘Le siècle des forges ou la Wallonie dans le creuset belge (1794-1914)’, in *Histoire de la Wallonie*, pp. 233-76 (pp. 236-37); 河原, 前掲, 373-76 頁。

¹⁷ Raxhon, pp. 239-42; 河原, 前掲, 376-78 頁。

¹⁸ Hélin, p. 202.

¹⁹ Francis Balace, ‘Un enfantement dans la douleur (1914-1950)’, in *Histoire de la Wallonie*, pp. 277-310 (pp. 278-81, 296-302); Francis Balace, ‘Liège dans la seconde guerre mondiale’, in *Histoire de Liège*, pp. 261-71; 河原, 前掲, 416-17, 427-25 頁。

²⁰ フランス語共同体・オランダ語共同体・ドイツ語共同体の 3 つの言語共同体と, ワロニー地域・フランデレン地域・ブリュッセル首都圏地域の 3 つの地域からなる 2 層の連邦制である(河原, 前掲, 434-36 頁)。

²¹ Claire Rosenberg「ベルギー, 新政権発足へ 政治空白は世界最長の 540 日に」(『AFPBB News』2011 年 12 月 6 日発信) 2018 年 1 月 30 日<<http://www.afpbb.com/articles/-/2844230>>。

²² Jacques Stiennon and Joseph Deckers, ‘Vie culturelle, artistique et religieuse du VII^e au XV^e siècle’, in *Histoire de Liège*, pp. 103-28 (pp. 105-07); 多田, 前掲『ヨーロッパ中世の民衆教化と聖人崇敬』とくに 79-81 頁; 多田哲「カロリング・ルネサンス」甚野尚志, 益田朋幸編『ヨーロッパ文化の再生と革新』(知泉書館, 2016 年) 所収, 5-21 頁。

²³ 津田拓郎「カロリング期フランク王国における王国集会・教会会議ーピピン期・シャルルマーニュ期を中心にー」(『ヨーロッパ文化史研究』第 11 号, 東北学院大学, 2010 年) 131-80 頁; 津田拓郎「9 世紀末～10 世紀初頭のフランク王国における王国集会・教会会議」(『ヨーロッパ文化史研究』第 12 号, 東北学院大学, 2011 年) 141-77 頁。

²⁴ Édouard de Moreau, *Histoire de l’église en Belgique*, Museum Lessianum: Section historique, 1-3, 11-12, 15, 6 vols (Brussels: Édition Universelle, 1945-52), 1: *La formation de la Belgique chrétienne des origines au milieu du X^e siècle*, 2nd edn (1945), pp. 264-72, 343.

[付記]筆者が東京都立大学大学院在学中に, 長きにわたってご指導を賜った河原温先生が, 2018 年 3 月に首都大学東京(旧東京都立大学)をご退職されることになった。先生のお導きがなければ, 研究者としての筆者の存在はなかったであろう。とりわけ本稿も多くの部分で, 先生の業績に負っている。これまで頂戴したご恩情に感謝の意を表して, また学界における多大なるご功績への尊敬の意を込めて, 拙稿を河原温先生に捧げたい。